

シンポジウム

古代世界研究会サマーセミナー（日韓国際シンポジウム・プレ大会）

古代世界研究会委員会

古代世界研究会は、1981年に「古代解放運動史研究会」として発足し、1996年に「古代世界研究会」と名称を変更して以来、主として西洋古代史に関心を持つ人たちの研究会として活動を続けている。本会の主要な活動の一つとして韓国との交流があり、1985年以来2003年まで3年に1度、日韓交互にシンポジウムを開いてきた。西洋古代史に関心を持つ学者たちのささやかな国際交流として、それは一定の役割を果たしてきたと言えよう。さらに、2004年春に東京で開かれた国際シンポジウムを機に中国における西洋古代史学者と交流の道が開け、翌2005年に中国上海で開かれた国際シンポジウムの折りに従来の日韓シンポジウムに中国が加わることが約束された。本研究会では、そうした状況に応じた研究環境を獲得すべく、科学研究費補助金の交付を申請して許可され、2007年9月下旬に、“City, State, and Empire; the Ancient Mediterranean World from East Asian Viewpoints”を統一テーマとして、日韓国際シンポジウムを日本で開くことを決定している（基盤研究B、研究代表者：田村孝）。2006年はその前年に当たるが、本研究会が毎年夏に開催しているサマーセミナーの機会を利用して、韓国と中国から指導的学者を招いて小規模な形でプレ国際シンポを開くことが企画された。本番の国際シンポジウムで起こりそうな問題をあらかじめ洗い出し改善の道を探ることと、とくに若手研究者にシンポジウムのやり方を体験してもらい本番での円滑な進行を図ることに主たる目的があった。

そのため、韓国と中国の招待教授には、英語で1時間程度の発表をして欲しいことを伝えた。中国上海の黄洋復旦大学教授からまず返事があり、2007年のテーマをも考慮した発表予定の題目を知らせてきた。これを基に韓国ソウルの金旻賢高麗大学教授にもあらためて要請を行い、なるべく大きなテーマの方が多くの者が討論に参加できてほしいことを伝えた。教授はしばしの逡巡の後、用意された二つのテーマのうちより大きい方のテーマを出してこられた。日本側では、黄教授のテーマを受けてまず高畠純夫東洋大学教授の発表が決まった。同教授には、創設以来の本研究会のメンバーであり委員でもあるため事情をよく知っていること、また、黄教授のテーマと重なる面があることが考慮されて、1時間の発表時間が与えられた。日本人の後の二人、松原俊文早稲田大学非常勤講師と宮崎亮東洋大学非常勤講師には、英語が堪能であることと現在発表できるテーマを持っていることが考慮され、30～40分程度の発表をするよう要請が行われた。幸

い二人とも委員会側の要請を快諾され、それぞれ現在取り組んでいるテーマを提出してくれた。

以上が本サマーセミナーに至る経緯であるが、提出された発表論文は結果的に、テーマに何の制限も加えなかった日本人二人の分も含めて、微妙な重なり合いを呈し、いずれも自らの目でギリシア・ローマを見ようと努めるものとなった。そこに盛られた結論が直ちに支持されないとしても、東アジアからの発信の一ステップとして評価できるであろう。セミナー自体は、9月23日、24日の2日間にわたって明治大学駿河台校舎において開かれ、30～40人の参加者を集めてきわめて盛会のうちに終了した。討論も、一部日本語のみでのやりとりも生じたが、基本的には英語で活発に行われた。コメントを要請しておいた若手研究者も、きちんと英文を作って配布するなど聴衆のことも考慮し、二人の招待教授も満足して帰国された。その様子については、古代世界研究会の「かいほう」90号に二人の教授の感想も含めて掲載されているので、そちらを参照いただきたいが、出席していた早稲田大学地中海研究所の小林雅夫早稲田大学教授が本セミナーの意義を評価され、発表論文をまとめて掲載することを申し出てくださったのは、当委員会として望外の喜びであった。小林教授の要請に応じて発表者は、討論の成果も考慮してそれぞれ発表論文に加筆修正を施し、ここに掲載するに至った。さらに本研究会現代表の田村孝千葉大学教授による開会の挨拶を加えた。これによって、本シンポジウムのねらいと本研究会が韓国、中国と交流する際の基本的スタンスが明らかになるだろう。

最後に当委員会として、小林教授と掲載のために細かな作業をなしてくれた地中海研究所スタッフに厚く御礼を申し上げる。